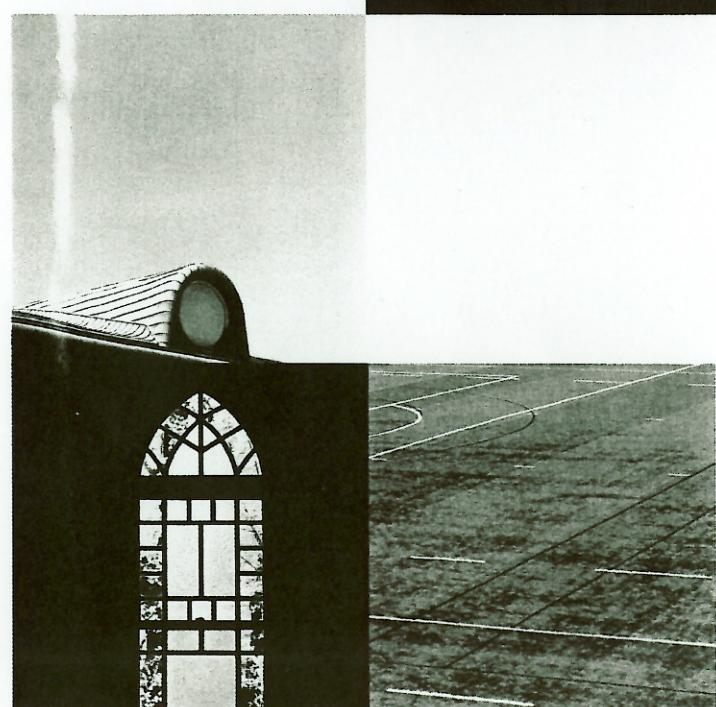
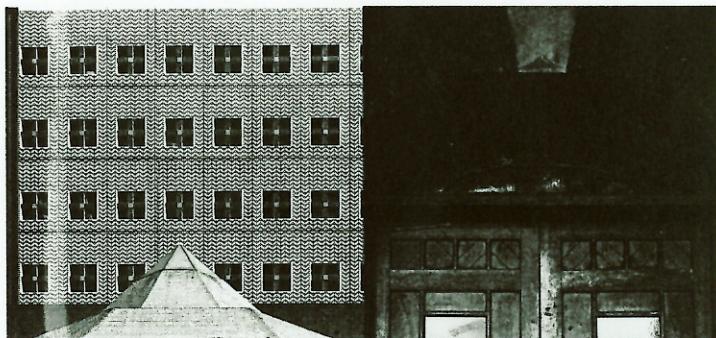


日本心理臨床学会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE CLINICAL PSYCHOLOGY

第 28 回秋季大会発表論文集



2009年9月20日(日)～22日(火・祝)

会場：東京国際フォーラム

担当校：明治学院大学



高校生の性的活動に関する心理社会的要因

—性意識・性行動とその他のリスク行動、家族要因、個人要因の関連—

石崎淳一（神戸学院大学）・三和千徳（神戸学院大学）・塚越克也（駒沢女子大学）

【問題と目的】

わが国の性行動は 1990 年以降に急激な変化を示し、特に性行動の若年化は青少年の重大な心理社会的、身体的な健康リスクとなっている。このような変化には心理社会的要因が大きいことが指摘されているが、心理学的な研究は少ない（石崎, 2005）。一方、米国では、青少年に対して性的自制を説く Abstinence Education（以下 A.E.）を基調としながら、健康リスク行動への対応をはかり、各種介入プログラムの効果をレビューする段階にある。発表者はこれまで本学会において、大学生とともに高校生を対象とする A.E. プログラムを検討し（加久ら, 2007）、その介入効果について報告をしてきた（石崎, 2008）。本発表では、昨年の調査結果に基づき、現在の高校生の性的意識・行動に関する心理社会的要因について報告し、その特徴を考察する。

【対象と方法】

- 1) 対象：A 高校の 8 クラスに所属する 3 年生全員。今回の分析対象は、大学生のピア授業を受ける前後の 2 回の調査で、両方の回答の得られた 206 人（男子 67 人、女子 139 人）。
- 2) ①意識調査：性知識、性行動、性意識に関する質問および、喫煙、飲酒、家族との会話、親への相談、親の性意識、2 種の自己効力感の質問を、各々 4 件法または 5 件法で聞いた。②18 項目からなる既存の心理ストレス尺度。
- 3) 手続き：対象者を 2 群に分け、大学生のピア授業を実施し、その前後で意識調査を行った。授業は、2 クラス約 60 人を合同で 2 時限（100 分）のプログラムとした。同じプログラムを 1 日の午前と午後に各 1 回、計 4 クラスに対して行い、これを 2 日間実施した。2 回の調査間隔は約 1 週間。
- 4) 高校での位置づけ：家庭科の高校への出前授業とした。授業内容は、「家庭総合」の青年期のライフサイクルの課題に関連づけられた。

【結果】

- I. 単純集計と前後比較の結果) ①知識：性感染症などの知識を問う質問に対する事後調査において有意な成績の向上を認め、全般的に高い正答率となった。②行動：性行動の経

験率は、男子 39%、女子 42% であった。③意識：「高校生の性交への許容」「不特定多数との性交の許容」などの性意識において、事前調査で全体的に許容的であったが、事後により有意に抑制的な方向への変化を認めた。これらの変化には男女の性差は認められなかった。

II. 項目間の相互関連) 性経験の有無で 2 群に分け、各項目を分散分析で比較した。①有意差を認めたのは、喫煙、飲酒、高校生の性交への許容、親の性交への許容、であった。②知識、家族との会話の程度、自己効力感、またストレスの程度には差を認めなかった。③前後調査における意識の変化は、性交経験群において有意に大きかった。④自己効力感やストレスの影響には男女の違いが見られた。

【考察】

性交を含むリスク行動間には、これまでの報告と同様に関連を認めた。性経験の有無と性知識は今回の結果では関連がなかった。経験者は高校生の性行動に対して意識がより許容的であり、さらにその親もより許容的である可能性が示唆された。前後比較では、これまでの発表と同様に、知識伝達や性意識の変化に対するピア授業の効果を認めた。これらに性差は認められなかった。過去に繰り返し確認してきた家族との親密さが性行動を抑止するという結果は、前回の調査に引き続き今回も得られず、高校生の性行動に対して抑止的な親と非抑止的な親に 2 分された影響がある可能性が示唆された。

（キーワード&発表者：高校生・性行動・家族、イシザキ・ジュンイチ、ミワ・チトク、ツカコシ・カツヤ）

【文献】

- 石崎淳一（2005）青少年の性的活動における危機をめぐって。臨床心理学, 5 ; 375–379.
- 加久はつ・中山尚夫・石崎淳一（2007）愛と性の尊厳—心豊かな思春期を送るために。アートヴィレッジ。
- 石崎淳一（2008）大学生による高校生への「性的自律教育（Abstinence Education: A.E.）」の試み。臨床心理学, 8 ; 553–558.